

# 北埼版「せんせのガッコ」から 見えてくるもの

羽生市立西中学校 佐藤俊次

大切なのは、「若い教師とどうつきあうていくのか」なのか。

「自前で、拡大の受け皿になる場を作ろう」それが、この学習会の始まり。それは、3年かけて社会科の勉強会を続け、一人の若者の要求に応え続ける覚悟が、分会とのタイアップにより、加入につながったことからの確信によるものだった。

組合員拡大は、役員にとつて最も重い、いやな課題。そう、何か「申し訳ない気持ち」になってしまい、億劫になる。組合員は、世のため、人のために高い組合費を払い続ける気高い人なのに、である。また、何かと若者重視の取り組みの中で、今まで組合を支えてきた年寄りが妙に肩身の狭い思いをしているのはなぜか。年寄りが若者に合わせる必要があるのだろうか。

自前というものは、支部の年寄りは、自分の実践を披露すべきだし、さらに自分の技術と思想を磨く発展途上であるという認識から。必ず、組合の訴えをすること。一人ではなかなかできなくても、みんながいたらできるから。

そう、私たち年寄りが胸張って組合員として生きるからこそ、大切なのではないか。

## 試行錯誤

第9条の模擬授業、福島原発の模擬授業、育鵬社版の教科書を使った模擬授業も。あえて避けられるテーマで若い先生を相手に、子どもたちと同様に授業をした。だんだん、未組合員も講師を引き受けてくれるようになった。地理の読図の授業、合唱コンクール前の指導法授業、道徳授業、いずれも未組合員である。また、それぞれの実践交流や悩みの交流では、今実践で苦悩している未組合員たちが、苦悩を語ってくれた。そんな時は、年寄りがかつて若かった時の経験を熱く語ってくれた。だから、大丈夫よ、がんばれと。知名度の高い先生をお呼びして取り組む講演会は悪くない。しかし、それでは、一発花火。いっぱいきた、やったあでおしまい。ちよつとだけ勇気を出して、やってよと頼む。意外に引き受ける。焼き肉が待ってるからと(笑)

彼女が、かつて所属した管理的な学年運営の中で、自由とやりがい喪失しそうな顔をしていたので、学年違っていたけれど、国際理解教育の視点で私の人権教育の発表に協力してと頼んだら、喜々として「パーンガ」を実践してレポートしてくれた。すてきだねとほめた。それから仲間と一緒に

酒飲んだりして、せんせのガツコで実践の悩みを話して頼んだらすぐ引き受けてくれた。それ以来、ほとんど毎回参加し、彼女は、組合に入ることを決意した。

役員はじめ、各分会に連絡し、毎回悩める人、疑問をもつ人、入ってほしい人に声をかけ誘ってもらった。未組合員が一人も来なかったこともある。たいてい、疲れて誘うことが億劫になったとき。つまり、自分が自信を失っているとき。

## 誘える力

労働組合は、資本主義下で労働者を守る唯一の合法的な組織である。しかし、現実社会とりわけ教員社会にあつては特にその認識が希薄である。聖職と思つている管理職、若者の何と多いことか。だから、その雰囲気の中で、「飲み代、貧乏労働者は、たいへんだけ頼むよ、諸君ー」などと職員室で大きな声で笑つている者がいたら、変だ。まして、「私は、賃金労働者であることに誇りをもつて働いている」「労働時間、契約された労働内容を履行することによって生活している誇り高い賃金労働者である」と豪語する組合員は、職場では異色というか、奇異に映るかもしれない。「日常の私です」笑)

教師になりたくてなつた若者たち。彼らが、苦悩している。自分のアイデンティティを疑い、日々をやつとこのことで生きている。無神経な管理職の発言に傷つき、痛めつけられ、しかし共有する仲間もいない。仲間はむしろ競争相手でしかない。たつた一人で努力をし続ける。：許せないでしょう？だから。組合が必要なのだ。私たちは、君らを決して一人にしないからと。

どうつきあつていくか、ではない。まず、私たちは、若者たちに何を伝えたいのか、何を伝えなければならぬかと考えているのか、ではないか。

私は、中学校の学年主任。5月途中で、病休に入つた担任の代わりの臨時の担任を兼ねる。病休に入つたとき、すかさず管理職に国語の授業をやってくれと頼んだ。校長・教頭二人とも国語だったから。彼らは、3回頼んで首を縦に振らなかつた。彼らは、すでに教師ではないのであつた。わたしは、臨時の担任で給食も食えずに事件にあつたついで、職員室に戻ってきたら、管理職たちは、4時間目が終わるか終わらないかの間に給食を食べ始めていた。妙に腹が立つて、思わず大きな声でつぶやいた。「よく飯が食えるな」と…。

若い教師とどうつきあつていくか、では

ない。私たちが、どう生きるかではないか。若者は、来る。なぜなら、まともな教師になりたいと思つているから。

管理職に今のままじゃチョン(首)だぞとプレッシャーかけられた新任が、その不安をとりの若い組合員に聞いてもらい、不安とたたかつていた。若い組合員は、なぜ組合が必要かを丁寧に語り続け、私を2学期の始業式の日呼びつけ加入の確認をした。(笑) その若い組合員は、私の「後継者」(と彼は言つている)である。3年かけて組合に入ることを決意して入つたあの彼。そして、その入りたての彼は、9の日宣伝行動で車でティッシュを配つているとき帰宅途中にあつて、ついでに不器用にも一緒にティッシュ配りを手伝つていった。そのとき宣伝行動に一緒に参加していた未組合員の二人が加入した。

若者たちは、きつとくる。実に多くの若者たちが、それでも声かけきらずこぼれている。「今の君のまんまでいいからな」「肉とニンニクの大好きな君がいいなあ」つて言つてあげましょう。

もちろん、年寄りの私たち、今のまんまでいいじゃないですか…。